

2018-19 年度カリキュラム検討委員会報告

結 城 佐 織

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUC）は北米の大学生・大学院生などを対象に、学術または実務において高度なレベルの日本語が必須である者の中・上級日本語の集中教育を行う日本語教育・研究機関である。2,000名を超える卒業生は研究者や政府関係者あるいは実業家として世界中で活躍している。スタンフォード大学をはじめとする北米の14大学の教授陣により構成される代表委員会が管理、運営している。カリキュラム編成などは主に日本側のスタッフが担当している。固定資産を有せず、施設・備品等については横浜市から提供を受け、運営費は授業料と加盟大学からの拠出、教科書の販売収入などによって賄われている。学生に対しては、日本財団、ワタナベ財団などの団体が奨学金を支給している（参考：IUC 2019）。

日本には、2019年6月28日に公布、施行された「日本語教育の推進に関する法律」（文化庁2019）¹に関連して、プログラム・カリキュラムの変更を迫られている日本語教育機関が多くある。一方でIUCは大学院生や実務者を対象にした中・上級の日本語教育・研究機関であるため、現在の日本の大学予備教育や別科、専門学校などにあるようなプログラム・カリキュラムの変更に関する外部からの圧力は比較的低いと言えるであろう。しかしながらアメリカ・カナダの日本語教育や学生の質の変化への対応、日本語教育の潮流への対応が迫られている。

IUCでは2017年9月にカリキュラム検討委員会（以下、委員会）を設置した²（佐藤2018:145）。2018-19年度も2018年8月から2019年7月にかけて月に1回1時間を目安とし、全12回、IUCのカリキュラムを再検討すべく話し合う機会を設け、職員全体会議での意見を踏まえて議論を重ねてきた。本稿は2018-19年度のカリキュラム検討委員会の報告である。

2 IUCのカリキュラム

IUCのカリキュラムの現状を把握するツールとして、現場の問題をプログラムの視点から見ることを目指す「言語教育プログラム可視化テンプレート_Ver2.22_教師版」（言語教育プログラム研究会2019）の中の「カリキュラム・シラバス等（基本計画）」を参考に、委員会でもIUCのカリキュラムの全体像の把握と確認を行った（表1）。

表1 カリキュラム・シラバス等 (基本計画)

コース/ カテゴリー	<p>：どのようなコース（科目）、活動の単位となるカテゴリーがありますか。</p> <p>文法復習、待遇表現、接続表現、統合日本語Ⅰ、統合日本語Ⅱ、統合日本語Ⅲ、総合運用Ⅰ、総合運用Ⅱ、総合運用Ⅲ（選択必修：現代史、大衆文化、ビジネス社会）、選択A（専門科目：歴史、文学、文化人類学、政治・経済、法律、日本学概論）、選択B（読む、聞く、話す、書く、ビジネス日本語）3、選択C（書道、ビジネス、漢文、文語文法）日本語能力試験、プロジェクトワーク、毎日のスキル（読む）</p>
レベル	<p>：各コースやカテゴリーは、どんな日本語レベルを想定していますか。</p> <p>中・上級、超級、専門日本語</p>
サイズ（人数）	<p>：各コースで想定する参加学習者は何人ぐらいですか。</p> <p>4-10人。プロジェクトワークは基本的にマンツーマン。選択Cは人数の制限は無い。</p>
期間	<p>：各コースはどのくらいの期間実施されますか。</p> <p>1学期8週間。待遇表現、接続表現は2週間。文法復習、統合日本語Ⅰは6週間。選択Aは2学期間。選択Cの書道は通年、他の選択Cは2学期間。</p>
授業（活動）の ①単位時間と ②頻度	<p>：各コースでは、①どのくらい長さの授業（活動）を、②どのくらいの頻度で行ないますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・50分×2コマ×5日/週 <p>文法復習、待遇表現、接続表現、統合日本語Ⅰ、統合日本語Ⅱ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・50分×2コマ×4日/週 <p>総合運用Ⅰ、総合運用Ⅱ、総合運用Ⅲ（選択必修：現代史、大衆文化、ビジネス社会）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・50分×2コマ×2日/週 <p>統合日本語Ⅲ、選択A（専門科目：歴史、文学、文化人類学、政治・経済、法律、日本学概論）、日本語能力試験文法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・50分×2コマ×1日/週 <p>選択B（読む、聞く、話す、書く、ビジネス日本語）、選択C（書道、ビジネス、漢文、文語文法）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・50分×1コマ×1日/週 <p>プロジェクトワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10-20分×4日/週⁴ <p>毎日のスキル（読む）</p>

<p>内容（技能・ジャンル・活動、など）</p>	<p>：各コースでは、どのような内容を目的として授業（活動）を行いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文法重視 文法復習、接続表現、統合日本語Ⅰ、統合日本語Ⅱ、統合日本語Ⅲ₅、日本語能力試験文法、選択C（文語文法） ・スキル重視 選択B（読む、聞く、話す、書く、ビジネス日本語）、毎日のスキル（読む） ・運用重視 待遇表現、総合運用Ⅰ、総合運用Ⅱ、総合運用Ⅲ ・内容重視 選択A（専門科目：歴史、文学、文化人類学、政治・経済、法律、日本学概論）、選択C（ビジネス、漢文）、プロジェクトワーク₆ ・その他 選択C（書道）
<p>その他</p>	<p>SKIP、校外学習、レクチャーシリーズ₇、講演会、日本財団フェロープログラム₈などもある。2学期と3学期末にはミニ発表会、年度末には卒業発表会が行われる。</p>

* 「言語教育プログラム可視化テンプレート_Ver2.22_教師版」を編集

現行のカリキュラムでは前期に日本語の基礎固めを行い、後期に専門科目などの内容重視の科目を行う体制になっている（青木ほか2007）。クラス分けは、前期はプロフィシエンシーテストの結果を中心に、後期は学生の専門や興味、日本語の能力を中心に行われる。IUCには単位制度はなく、成績を出すことはない。

一般的な大学予備教育や別科、日本語学校では、研究者や実務者を目指す中・上級日本語学習者向けの日本語教育に集中した専門科目を設置しているところは数少ないであろう。このため「言語教育プログラム可視化テンプレート_Ver2.22_教師版」にどのように位置づければよいのか明確ではないものは、選択A（専門科目：歴史、文学、文化人類学、政治・経済、法律、日本学概論）や、プロジェクトワーク、専門日本語のレベルであった。

詳細なカリキュラムの検討に関しては別稿に譲ることとし、委員会では今後も他の機関との比較を行いながら、IUCの特徴と独自性を強めて行く方向でプログラムやカリキュラムを検討していきたい。

3 2018-19年度の委員会の検討議題

3では委員会で重要視された議題を中心に報告する。尚、2018-19年度の具体的なカリキュラムの内容については佐藤(2019)を、ニーズ調査に関しては結城(2019)を参照されたい。

3-1 3つのポリシー

3つのポリシーに関しては、佐藤 (2018: 149-151) の内容を教職員会議にかけ、修正を加えた。カリキュラム・ポリシーに「教養ある日本人と対等に意見を交換できる」と入れた。「教養ある日本人」という表現に問題は無いのかという意見もあったが、アメリカでは一般的に使われており違和感は無いということで加えた。また IUC の特徴である専門性も強調した。アドミッション・ポリシーの大きな変更点は「大学などで3年以上かつ450時間以上の日本語教育を終えたか、それに準ずる程度の日本語力を持つ。OPI 中級あるいはN2程度以上が望ましい」である。学習暦を3年以上としたのは、学習暦が2年以下の学習者は議論など、教科書から離れた活動を行う際に他の学生との差が顕著であるとの声が教員から上がり、更に学生自身もクラスメートとの日本語能力に差があり授業が辛いなどと訴えることもあるからである。現在の状況を踏まえ、アドミッション・ポリシーに佐藤 (2018: 150) で検討していたアメリカで広く知られている会話能力を測定する OPI を入れ、更に第一案ではN3合格～N2程度としていたものを教職員の意見を踏まえ、N2程度以上が望ましいという文言に修正した。全体的に文言が長い、量が多いという指摘を受けたため再度修正し、3つのポリシー第2案(資料1)を2019年3月の代表委員会に提示した。

3-2 学生に対する評価

佐藤 (2018: 152) には「他の機関の基準との対照をしたセンターの段階的評価案をさらに検討していく」とある。カリキュラム開発に評価の再検討は必須であるが、機関独自の評価にするか、他の言語評価基準と対照できる評価にするかで内容が大きく異なる。2018-19年度の委員会で挙げた検討内容は以下の①～⑦である。

- ① 外部評価に対応できる評価にどのようにするのか
- ② 最終評価の形式をどうするのか
- ③ 一般日本語と専門日本語の評価を分けるのか
- ④ 口頭発表をどのように評価するのか
- ⑤ Can-do 形式にするのか
- ⑥ 段階評価にするのか
- ⑦ 評価表をどのように利用するのか

浜田 (1989: 7-8) は評価手段について「評価の時期によって①「事前的評価(活動開始以前の評価: 選考試験、クラス分け試験など) ②「形成的評価」(活動途上の評価: 診断テスト、中間テストなど) ③「総括的評価」(活動の区切り点での評価: 期末テストなど) に分けられる(中略) 評価の本来の目的を考えた場合、つまり、コースの改善と学生の効果的指導のためには形成的評価が一番大事だということになる」⁹⁾としている。委員会でも

浜田の3点について検討している。事前的評価については3-3を参考されたい。

検討内容の①-③についてであるが、外部から学生の日本語力に関する問い合わせが来た際、外部に明確に提示できる評価が必要であるという意見が出たため改定することになった。委員会では最終評価表のイメージとして資料2、資料3の案が提出された。但し1で見たように、IUCのプログラムは研究や実務などに関する中・上級以上の専門的な業務に対応できる日本語力の強化を目指しており、いわゆる大学の予備教育や日本語学校などの日本語教育機関とは教育目標が異なる点が多く、日本語能力試験やCEFR₁₀などだけでは計測できないという側面もある。このため、2019年7月現在では最も課題の多い項目であると委員会では捕らえている。

④については、発表原稿を活動ととらえ、執筆した際にどのような評価をするかという点が問題になっている。浜田(1989:13)には「発表だけをみて学生の日本語能力やセンターでの学習程度を判断するのは気をつけたほうがいい。というのは発表会の発表原稿は何度か教師の目が通ったものであり、学生の力をそのまま反映していないからである。むしろ発表会やレポートの評価で大切なのは、最終作品に至るまでのプロセスであろう。そのプロセスにおいて担当教師は学生の行動を評価しフィードバックし学生の作業を援助する。となると、発表会の場合、評価はむしろプロセスにおける評価に拠るべきである」とある。委員会ではプロセスにおける評価として、文法、語彙・表現、構成(抽象度と一般化、論理を評価する)、ネイティブの助けのあるなし(専門性は評価に含まず)などを考えている。更に発表時のパフォーマンスも評価対象にするべく、発表時に原稿を見るか見ないか、パフォーマンスの正確さ(文法・語彙・表現)、発音を加味する方向で進めている。パフォーマンスを評価に加味したのは、原稿やパワーポイントが仕上がったのちに自ら努力して、より美しい日本語で発表しようとする学生の存在があるからである。④については佐藤のクラスと結城のクラスで試験的に評価表を作成し(資料4、資料5)学生に提示した。両クラス共に発表会の目的や教師が何を評価するのかが明確になり、学生の動機付けの一端を担えたといつてよいだろう。

⑤と⑥についてであるが、IUCでは2011-12年度にCan-do形式の学習目標の設定を試みたことがある。串田(2012:52-53)によると「ここでのCan-doとは、熟達度に基づいた厳密な尺度によるものではなく、あくまで学習を効果的に導くための日々の学習目標として作用するように考えた(中略)つまり熟達度に応じた例示的能力記述式とは全く性質を異にするものであり、あくまで「文法復習」の中での学習促進ツールとしての機能を果たす装置として作成している」というものである。今後は⑥の段階形式の評価との兼ね合いを考え、Can-do形式の学習目標にするのか、Can-do形式の学習到達度評価にするのか、単なる段階形式の評価にするのか、あるいは3つの要素を取り入れたものを作成するのかなどを検討していかねばならない。

⑥に関連し⑦も考慮すべき必要性が出てくる。Can-do形式あるいは段階形式のいずれに

するとしても、委員会では評価のすべて、あるいは一部を学生に提示し、目標としても利用してはどうかと考えている。現段階では評価の提示方法として、まず学期の初めに提示し、学期末に自己評価をさせ、教師の評価とすり合わせを行うという案が提出されている。しかし学生の自己評価と教師の評価に大きなずれが生じた場合に、どのように教員の認識と学生の認識のすり合わせを行うべきなのかという懸念もあり、対応についても教員間である程度の共通認識を持っておかなければならないであろう。

以上評価について 2018-19 年度の検討委員会では④以外を加味した 3 パターンの評価の原案を作成した¹¹。しかしながら課題は多く、2019-20 来年度以降も更なる検討、修正、改善、改善を行っていかねばならない。

3-3 試験

スクリーニングテストも検討課題の一つである。アドミッション・ポリシーに OPI の基準を加えたが、スクリーニングテストでも会話能力や作文などの日本語のプロダクションの試験を導入するべきではないかとの意見が教職員会議で出された。IUC の 1 学期から 3 学期の午後のクラスは言語の運用能力を伸ばす時間に当てられており、議論や話し合いなどの活動量が増加するからである。2019 年 7 月現在、教育の質を維持するために日本側の教員が最も問題視しているのは学生の日本語のレベルであり、インタビュー試験の導入を代表委員会に提案している。これを受け委員会ではスクリーニングテスト時の会話能力測定方法について話し合われた。案として質問と回答時間を合わせて 20 分程度のインタビュー試験のビデオを作成した。インタビュー試験のビデオをインターネットで閲覧しながら、受験者自身が自身の答える様子を録画し、IUC に送るというものである。2019 年 7 月に、教職員会議でインタビュー試験の実施を検討すべきという提案が再度出され、委員会で作成した「スクリーニングテストのスピーキングについて（案）」（資料 6）を元に、実施方法と試験の日程等の調整を具体的に提示する予定である。

2017-18 年度から 2 学期の終了時に行われる中間試験は改定されている。2016-15 年度までは総合運用Ⅱの到達度試験を全学生に課していたが、学生より日本語の伸びを知りたいとの声が上がリ、実力試験に変更した。但し、二学期末の実力試験はスクリーニング時の日本語力と比較しており、スクリーニングテストの時期が学生により異なるため、計測している日本語力の伸びの時期が学生により異なるという問題や超級の学生の伸びは測れないなどの課題は残っている。

最終試験のインタビュー試験についても話し合われた。現在は日常会話、専門、時事問題についての 3 つの項目を測っているが、出題を事前に通告していること、時事問題をカリキュラムとして全体で扱っているのは、1 学期の午後の総合運用Ⅰと選択 B のリスニングのみであることなどの問題点も残る¹²。もし時事問題を最終試験での評価の対象とするのならば、通年、少なくとも半期以上¹³はカリキュラムに組み込むべきではないかという

意見も出た。

またスクリーニングテストや最終試験では、中・上級の日本語学習者が間違いやすい日本語に関連した問題の割合が高く、超級の学生の日本語力の伸びが測れないという問題点もある。この件に関しては教員の意見も一致しており、今後の試験問題の改定が求められている。

レギュラーコース期間内に行われる一斉試験はプロフィシエンシーテスト、中間試験、最終試験がある。このうち中間試験と最終試験に関しては学生の日本語の伸びを測る試験が望ましいという意見が委員会でも出ているが、問題は「何を、どのように測るか」である。委員会でも何を測るかについては意見が分かれている。実力試験であるならば外部試験を利用する案も提示されている。また IUC には専門科目もあり、専門的な日本語の能力を伸ばすという使命も持つ。この専門的な日本語をどのように測るのかも課題が残る。しかし実力試験にしる到達度試験にしる、IUC での教育の成果を測れるものを作成しようとするならば、カリキュラムと「評価」との関連は必須である。IUC の教育成果を測れる「評価」方法の提示が急がれる。

3-4 ニーズと科目の設定

委員会では学生のニーズに合わせるために選択 B についても検討を行った。201-18 年度の選択 B (スキル：速読、精読、即聴、精聴、書く、ビジネス日本語) に対し、2018-19 年度はニーズの高い「話す」クラスを増やし、「読む」「聞く」に関しては選択数を減らし、最終的に選択 B (スキル：読む、聞く、話す、書く、ビジネス日本語) とした。これは学生の第一希望を満たし、かつ、日本語能力別のクラス編成をしやすくすることが狙いであった。しかしながら 1 クラスあたりの学生数、クラス編成、教員の配置に問題があり、学生全員のニーズを満たすことはできなかった。IUC の専任講師一人当たりの学生数は、2018-19 年度は 6.2 人、2017-18 年度は 7 人、2016-17 年度は 5 人、2015-16 年度は 6 人である。IUC では教室や教員数などの物理的理由から、基本的に 1 クラス 11 人以上にすることは困難である。現状においては学生のニーズをすべて満たせる体制はほぼ不可能に近いであろう。しかしながら選択科目数の調整やニーズを可能な限り満たせるような選択科目の配置、カリキュラム全体での位置づけなどを念頭に置き、選択科目の設定の仕方、提示の仕方、アンケートの取り方などの検討を進めていかねばならない。

結城 (2019) の学生へのインタビューや年度末の Questionnaire において好評なのが、待遇表現と選択 A (専門科目：歴史、文学、文化人類学、政治・経済、法律、日本学概論)、プロジェクトワークである¹⁴。待遇表現は IUC の日本語教育の強みであるため¹⁵、委員会でも充実させていく方向で検討できればと考えている。カリキュラム全体に関する不満として多いのは、学生のニーズとの不適合によるものである。例えば実務希望者からは新聞講読やニュースを長くやりたい、アカデミック・ジャパニーズ関連は不要であるなどの声

があり、研究職希望者は新聞講読やニュースは不要であり、専門科目やプロジェクトを1学期からやりたいと考えるなどの声がある。2019年7月現在、教養ある研究者を目指すIUCのカリキュラムとして、新聞やニュースをカリキュラムに残す事は意見の一致をみているが、現行のまま1学期の午後のみ組み込むのか、例えば週1回新聞やニュースの時間を取り入れ年間を通してできるだけ長く組み込むのか、この2案を教職員会議にかけ、検討中である。

また近年のデジタル化にともない、漢字の手書きを学ぶ必要があるのかという意見もある。教師側は漢字を正しく手書きできることは漢字の認識にも繋がるという意識もあり、カリキュラムとしてどこまでを必須とするのかについても検討が必要であろう(大橋2017:46)。

更に委員会では内容重視の科目を前倒しする案も出されている。しかしながら日本語の基礎力が充分でない学生がクラスから取り残される場合が増えることが予想されるため、学生のニーズと科目設定のバランスを加味した慎重な議論が求められる。

3-5 シラバスの公開

カリキュラムに関する情報公開として、2019年1月よりホームページにシラバスの掲載を開始した(IUC2019)。2018年12月までホームページなどで公開していなかった理由の一つは、IUCでは学生のニーズや興味に合わせて授業計画を適宜変更して行くため、年度当初の計画通りには進まない可能性が高いからである。しかし、IUCでの教育内容を具体的にイメージできずに入学してくる学生がおり、授業に支障が生じていると感じている教員がいること、授業内容がわかっている場合、入学前に準備ができたという学生の声があったことから、シラバスの公開を開始した。また、IUCのシラバスは学生の今後にも役立つ。2019年9月以降にアメリカで日本語関連の授業を受け持つことになった2018-19年度の学生が、IUCのシラバスを参考に自らのシラバスを組み立てていた¹⁶。IUCには大学の教職に就こうとするものがあるため、学生の授業計画に利用することも可能であろう。

4 2019-20年度の検討事項と活動内容

2018-19年度のカリキュラム検討委員会で検討された会議記録抜粋を資料7として挙げておく。2017-18年度同様、今後カリキュラムを検討する際に参考になると考えるためである。2019-20年度の主な検討事項と活動内容として、以下の①~⑨を明記しておく。

- ① 3つのポリシーの再確認と公表の仕方
- ② 評価表の内容(年度内評価、最終評価、外部評価との対応)
- ③ ニーズ調査の実施と分析(3、4回目)

- ④ カリキュラムの改定
- ⑤ 定員制の必要性の検討
- ⑥ スクリーニングテストの変更の可能性
- ⑦ 試験内容の変更
- ⑧ 入学前の課題の内容
- ⑨ 宿題の全体量の把握と調整を行うべきか

いずれも難題であり、短期間では成果の出せない、委員会だけでは改善できないものである。今後とも非常勤講師を含めた教職員の尽力をいただきながら、少しでも推し進めて行きたいと考えている。

5 おわりに

2018年8月から2019年7月にかけてカリキュラム検討委員会で話し合われた内容のうち、重要な議題として検討されたものを中心に報告した。2018-19年度に3つのポリシーを代表委員会に提案できたこと、ニーズ調査を2回行えたことは委員会の活動の成果として考えたい。2019年7月現在で最も難題である評価については、この2年間で様々な角度から議論を行ってはいるが、他項目との関連性も高く、課題も多く、道のりは長い。しかし、IUCに相応しい評価方法の作成に向けて一歩ずつではあるが進んでいると確信している。今後は残された検討課題を議論し、他の機関との比較も行いながら、IUCの特徴と独自性を強めて行く方向で検討していきたい。

委員会は多岐にわたる課題を全体会議にかけることで、その方向性の修正が施され進んできた。教職員全ての協力の下で検討が進んでいることをここで改めて強調しておきたい。

注

- 1 「この法律は、日本語教育の推進が、我が国に居住する外国人が日常生活及び社会生活を国民と共に円滑に営むことができる環境の整備に資するとともに、我が国に対する諸外国の理解と関心を深める上で重要であることに鑑み、日本語教育の推進に関し、基本理念を定め、並びに国、地方公共団体及び事業主の責務を明らかにするとともに、基本方針の策定その他日本語教育の推進に関する施策の基本となる事項を定めることにより、日本語教育の推進に関する施策を総合的かつ効果的に推進し、もって多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現に資するとともに、諸外国との交流の促進並びに友好関係の維持及び発展に寄与することを目的とすること」文化庁 (2019) より
- 2 カリキュラム検討委員会のメンバーは、佐藤有理 (リーダー)、秋澤委太郎、結城佐織

- の3名である。中心的な議題に関しては、佐藤有理が評価、秋澤委太郎がポリシー、結城佐織がニーズの中心になり進めている。2018-19年度の記録係は結城である。
- 3 2017-18年度、2018-19年度ともに、4学期には「読む」の中に現代小説、日本人論の二つが追加される。
 - 4 総合運用Ⅰと総合運用Ⅱの授業時間内に行われる。
 - 5 統合日本語Ⅲの教授目標等に関しては、教員間でも見解が分かれている。全体のカリキュラムの特性からカリキュラム検討委員会の見解として、現段階では「文法重視」に分類しておく。今後も検討が必要である。
 - 6 4学期に学生自身の専門に関する学習を教師と1対1、週1回50分で行える。内容は多岐に渡る。
 - 7 IUCの卒業生を講師に向かえ、専門分野についての講演を提供する。日本財団との共催である。
 - 8 ある専門分野において指導的役割を果たすのに必要とされる日本語能力及び文化知識を有し、将来、その分野において活躍が期待できる若手研究者を対象に、受給生間および卒業生との間の絆を強め、知的交流を深める目的で提供されるものである (IUC 2019)。
 - 9 IUCのことを教職員はセンターと呼ぶ。
 - 10 Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment の略。欧州を中心に広く活用されている語学力のレベルを示す規格であり、近年日本語教育でも参考にされてきている。
 - 11 佐藤が一般日本語と専門日本語を分けたもの、一般日本語と専門日本語を一緒にしたもの、改定版の3つの原案を作成した。但し、本稿には紙面の都合上掲載しない。
 - 12 ただしⅡの授業でニュース報告などを取り入れているクラスもある。
 - 13 10ヶ月のカリキュラムなので、約5か月となる。
 - 14 個人的なコメントも含まれるため、本稿では詳細を省く。
 - 15 2020年3月に「待遇表現」の改訂版を出版すべく、学生や非常勤講師の協力も得ながら専任教員で鋭意努力中である。
 - 16 非日本語母語話者の学生がIUCレベルの学生の日本語の授業をアメリカで受け持つことは皆無に等しい。

引用文献

青木惣一・大竹弘子・大橋真貴子・串田紀代美・佐藤有理・佐藤つかさ (2007) 「日本研究センターにおける専門分野別日本語教育—日本関係の専門分野を有する大学院生・専門家に対する専門分野別内容重視アプローチの実践報告—」『アメリカ・カナダ

- 大学連合日本研究センター紀要』第30号 pp.79-121
- 大橋真貴子 (2017)「KIC 統一試験の報告—学習意欲を高める漢字試験への模索—」日本研究センター教育研究年報第6号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.44-52
- 串田紀代美 (2012)「Can-do 形式によるタスク遂行型のシラバス構築の試み—中上級レベルの「文法復習」シラバスの見直し—」日本研究センター教育研究年報第1号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.39-65
- 佐藤有理 (2018)「カリキュラムを再検討する取り組み —教育目標と評価の見直しを中心に—」日本研究センター教育研究年報第7号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.145-160
- 佐藤有理 (2019)「2018-19年度カリキュラム報告」日本研究センター教育研究年報第8号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.158-172
- 浜田盛男 (1989)「『評価』の役割と位置づけ」アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要12 pp.1-18
- 結城佐織 (2019)「アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターにおける中・上級レベルの日本語学習者に対するニーズ調査」日本研究センター教育研究年報第8号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.119-145

URL

- IUC「アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター」<<https://www.iucjapan.org/>> (2019.7.19 閲覧)
- 言語教育プログラム研究会「言語教育プログラム可視化テンプレート Ver2.2」
<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/project/Pro_Ken/contents.html> (2019.7.15 閲覧)
- 文化庁「日本語教育の推進に関する法律の施行について（通知）」
<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html> (2019.8.1 閲覧)

資料

資料1 3つのポリシー（案）

①ディプロマ・ポリシー

教室活動、課題、校外学習への参加の積極性、ならびに各種テストと卒業発表によって教育の成果を判定し、カリキュラム・ポリシーに記載する目標に到達したと判断される学生に対して、修了証書を授与する。

②カリキュラム・ポリシー

「読む、書く、聞く、話す」の日本語4技能ならびに常用漢字の習得を目指し、本校の使命から導かれる以下の目標に学生が到達できるよう、教室活動、課題、校外学習を編成する。授業は少人数で、全て日本語を用いて行う。

- ・日本社会に違和感なく受け入れられる待遇表現や言語行動を身につけ、場面に応じて適切かつ正確に使用、実行することができる。
- ・専門分野について、研究や実務に必要な資料、専門書等の内容を正確に理解し、それについて専門家と日本語で話をし、まとまった文章を書き、口頭で発表できる。
- ・自身の専門分野に限らず、日本語のさまざまな言論を論者の意図に即して正しく理解し、それについて、教養ある日本人と対等に意見を交換できる。

③アドミッション・ポリシー

教室内外での主体的学習を通じて、学問あるいは実務に必要な高度な日本語力を身につけようとする意志のある者を受け入れる。具体的には、以下の条件を満たす者である。

- ・大学院生もしくは大学院進学予定の大学生、または、日本関係の分野に従事している社会人で大卒以上の学歴を持つ。
- ・大学などで3年以上かつ450時間以上の日本語教育を終えたか、それに準ずる程度の日本語力を持つ。OPI中級あるいはN2程度以上が望ましい。高度な学術的、専門的資質と将来性を備えており、自身の専門分野に限らず、日本の文化や社会をめぐる諸事象に積極的な関心を示せる。

以上

資料2 IUC 最終評価_イメージ (甲)

IUC 最終評価_イメージ (甲)					
氏名：					
IUC 総合評価：A					
評価Ⅰ：試験成績					
	最終試験	文法	漢字語彙 (KIC)	APJI	発音
評価	S	B	A	S	D

*APJI: Academic and Practical affairs Japanese for IUC (仮)

評価Ⅱ：専門日本語【S】

専門分野の日本語において、聞いたり読んだりしたほぼすべての話題を容易に理解し、その内容を論理的に再構成して、ごく細かいニュアンスまで正確に表現できる。

評価Ⅲ：一般日本語（評価Ⅱ以外）【A】

*コミュニケーションレベル (CEFR C1相当)

広範囲にわたる高度で複雑な話題を理解できる。自然で流暢に自己表現ができ、目的に合った適切な言葉を使って論理的な主張や議論もできる。

create@yuki

【解説】

- ・ APJI とは、いわゆるアカデミック・ジャパニーズのセンター版。語彙・文法・表現等を集中して行う。
- ・ 最終試験に何を含むかは要検討（文法の扱いなど）。
- ・ 評価Ⅰは、基本的に達成度試験。筆記試験可能。
 - *但し、発音は別だが、発音もテスト可能。
- ・ 評価Ⅱは、評価Ⅲの文言を変えた程度。
 - 例：広範囲における→専門領域において
- ・ 評価Ⅲは、CEFR との対照可能。
- ・ IUC 総合評価は、CEFR の「専門・得意分野はできるはず」という過程を前提とすれば、基本的に評価Ⅲになる。但し、評価Ⅱの方が低い場合は要検討。評価Ⅰを加味するかも要検討。
- ・ CEFR の文言は下記参考。

<https://www.benesse-glc.com/special/global/438>

資料3 IUC 最終評価_イメージ (乙)

IUC 最終評価_イメージ (乙)					
氏名：					
IUC 総合評価：A					
評価Ⅰ：試験成績					
	最終試験	文法	漢字語彙 (KIC)	発音	APJI
達成度	90	70	80	50	90
評価	S	B	A	D	S

*APJI: Academic and Practical affairs Japanese for IUC (仮)

評価Ⅱ：専門日本語【S】

読む	聞く	話す	書く	口頭 交流	文章 交流	意図
S	A	A	A	A	A	B

評価Ⅲ：一般日本語（評価Ⅱ以外）【A】

*コミュニケーションレベル (CEFR C1相当)

読む	聞く	話す	書く	口頭交流	文章交流	意図
A	A	B	A	B	A	B

create@yuki

【解説】

- ・細かい評価基準を載せるバージョン

資料4 プレゼンテーション評価表原案 18-19 年度①

	評価項目	1-----2-----3-----4-----5		
原稿・ パワー ポイント	文法	誤りが非常に多い-----誤りがほとんどない *変換ミスを含む		
	語彙・表現の洗練さ	かなり不自然-----洗練されている		
	構成・わかりやすさ	読み手に誤解を与える-----誤解が全くない		
	専門性・抽象度	低い-----高い		
	ネイティブの助け	非常に必要-----全く必要がない		
パフ オー マンス	原稿を見る	不正確-----ほぼ間違えない		
	原稿を見ない	不正確-----原稿を読まずに完璧		
	発音・聞き取りやすさ	誤解を与える-----ネイティブ並み *声の大きさ、発音も含む		
	ビジュアルエイド	不適切-----適切 *タイミングを含む		
	聴衆への態度	原稿から顔をあ げない	時々聴衆を見る	しっかり見渡し ている
	質疑応答	質問に答えてい ない	何とか質問に答え ている	適切に答えられ ている

create@ari

*佐藤が作成したものを本稿用に筆者が形式を編集した
*評価はスケール。表の右のほうが評価のポイントが高い

資料5 プレゼンテーション評価表原案 18-19 年度②

	原稿なし・メモ程度	原稿あり
S	高度な日本語を使用している。日本語の間違いもほぼ無く、イントネーション、アクセント、発音、タイミングともに正確でネイティブなみ。PPTなどの資料の使い方も良く、専門的な内容を分かりやすく十分に伝えられている。聴衆に目を配りながら人を引きつける発表ができている。質疑応答も過不足無く端的でわかりやすい。	なし

A	高度な日本語を使用している。日本語の間違いはややあるが、キーワードのイントネーション、アクセント、発音は正確。タイミングもよく、聞きやすい。PPTなどの資料の使い方も良く、高度な内容を分かりやすく十分に伝えられている。聴衆に目を配りながら人を引きつける発表ができています。質疑応答はわかりやすくできています。	高度な日本語を使用している。日本語の間違いはほぼ無く、イントネーション、アクセント、発音、タイミングともに正確でネイティブなみ。PPTなどの資料の使い方も良く、専門的な内容を分かりやすく十分に伝えられている。聴衆に目を配りながら人を引きつける発表ができています。質疑応答も過不足無く端的でわかりやすい。
B1	日本語の間違いがやや多く、イントネーション、アクセント、発音ともにあやまりが多めで聞きにくい。PPTなどの資料の使い方は良く、内容を分かりやすく伝えられている。聴衆に目を配りながら、それなりに発表ができています。質疑応答はそれなりにできています。	高度な日本語を使用している。日本語の間違いはややあるが、キーワードのイントネーション、アクセント、発音は正確。タイミングもよく、聞きやすい。PPTなどの資料の使い方も良く、高度な内容を分かりやすく十分に伝えられている。聴衆を見ることができ、人を引きつける発表ができています。質疑応答はわかりやすくできています。
B2	日本語の間違いがかなり多い。イントネーション、アクセント、発音ともにあやまりが多く、聞きにくい。PPTなどの資料を使い、それなりに内容を伝えられている。質疑応答はなんとかこなした。	日本語の間違いがやや多く、イントネーション、アクセント、発音ともにあやまりが多めで聞きにくい。PPTなどの資料の使い方は良く、内容を分かりやすく伝えられている。聴衆を数回見ることができ、それなりに発表ができています。質疑応答はそれなりにできています。
C1	もはや何を発表しているのか不明だが、原稿を見ないという努力の成果は出ている。	日本語の間違いがかなり多い。イントネーション、アクセント、発音ともにあやまりが多く、聞きにくい。PPTなどの資料を使い、それなりに内容を伝えられている。質疑応答はなんとかこなした。
C2	もはや何を発表しているのか不明だが、それなりに努力の成果は出ている。	もはや何を発表しているのか不明だが、それなりに努力の成果は出ている。

create@yuki

* 「原稿なし」は、原稿を書かないか、書いても当日読まないことを意味する

資料6 スクリーニングテストのスピーキングについて (案)

【スピーキング試験の方法】

案1: ビデオ録画、全員

1. 申し込み締切日の数日後の指定時間に、スタンフォードのホームページ等に掲示
2. 録画しながら問題に答える (10-15分程度。流しっぱなし。編集不可)
3. 掲示から1-1.5時間以内に、アップロードとメールで送信 (練習時間を極力与えない)
4. 採点 (全員を採点してもよし、レコメンだけを採点してもよし)

*メールでリンクを送るという手もある

*締め切りは日本での受験者も考慮

*練習問題を試験より前にできるようにする

*独話なので、実力の評価がやや難しい

案2: ビデオ録画、レコメンのみ①

*案1の手順に同じ

*レコメンの決定を待ち、通知する必要あり

*レコメンに「落ちるかもしれない/日本語能力が低い」という危機意識が芽生える

案3: Skype、レコメンのみ②

1. レコメンに面談可能日を通知
2. 指定の日時に Skype 面接
3. 採点

*レコメンの決定を待ち、通知し、日程の調整をする必要あり

*教員が待機する必要あり

*レコメンに「落ちるかもしれない/日本語能力が低い」という危機意識が芽生える

*相互会話なので、実力が図りやすい

【スピーキング試験の問題 (案1、案2の場合の例)】

案1: 問題文を教員が読み上げる様子を録画し画面に映す (時間が来ると次の問題に移る)

案2: 問題文と指定時間が、画面に映る (参照 PPT)

*PPTは例の提示のために、数秒程度で画面が変わるように設定してある

資料7 2018-19年度 会議記録抜粋

回	日付	検討項目
1	8/28	<ul style="list-style-type: none"> ・評価について CEFRなどの外部のものとすり合わせる必要があるか 専門についてどのように評価すべきか 専門との関連性 最終評価の項目について 試験と評価の関連について
2	9/25	<ul style="list-style-type: none"> ・ニーズの質問項目について 教員の意見を参考に書き換えた ・ポリシーについて 学習時間は折衷案にし、OPIなども入れた 教育目標は「内在的」を変更 「教養ある日本人」を入れ、「専門」を強調 四技能については最初にはっきり記述した ・評価について ①一般の日本語能力、②専門の日本語、③試験成績、を分ける 「専門の日本語」とはなにか テストは一般のものを利用してはどうか
3	10/23	<ul style="list-style-type: none"> ・評価に関してのまとめ
4	11/27	<ul style="list-style-type: none"> ・評価表のまとめなおし 右側にプロダクションをまとめた CEFRはいろいろなことにレベルわけができていない B2とB1の読むことなどに言葉を足した センターの学生には9月の段階でA1はいない 口頭発表には質疑応答を含めない ・口頭発表の評価について 発表原稿：文法、語彙・表現、構成（抽象度と一般化、論理を評価する） ネイティブの助けのあるなし（専門性は評価に含まず） パフォーマンスに正確さ（文法・語彙・表現）、原稿を見るみない

5	12/18	<ul style="list-style-type: none"> ・発表の評価について 「原稿を見る／見ない」は別にしたほうが良い 「原稿の準備」も別枠にする 発表のパフォーマンスの日本語で原稿分を評価 ステップを示せるといいといいのではないか Aクラス、Bクラスで実施（資料4、資料5）
6	1/18	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回ニーズ調査の報告 全体的に勉強時間が多いので、宿題をどうするか 1学期の文法のカリキュラムについて 教材をどう更新していくべきか ・単語リストの作り方（学生地震に作成させる、外部調査を参考に） ・発表の段階的評価の学生の評価
7	2/26	全体会議でニーズの報告内容の確認
8	3/29	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムについて シラバスをホームページに載せる（会議で問う） ・夏休みの宿題の内容の見直し 入学前にどの程度やらしていいのか（量と期間） 宿題をやらない学生への対応 ASJを宿題にしてみたらどうか ・アドミッション・ポリシーの条件 N3合格～N2程度 → N2程度以上
9	4/26	<ul style="list-style-type: none"> ・代表者会議の会議内容について 定員制の必要性と奨学金 選抜方法の変更の可能性 ・今後の活動について 夏休みの宿題の見直し・作成 評価の表の完成 2学期の終わりの実力テストの活用法 毎日のスキルを続けるのか 職務分担表の担当を移動
10	5/28	<ul style="list-style-type: none"> ・ニーズ調査の途中報告 ・サマーの宿題について ・次年度までにやっておくことの確認（あり作成プリント）

11	6/27	<ul style="list-style-type: none"> ・「言語教育プログラム可視化テンプレート_Ver2.22_教師版」を参考に、IUCのプログラム全体の確認と、見直し項目の洗い出し ・2019-20年度のカリキュラム検討委員会の活動予定の確認 ・夏休み中の委員会の課題
12	7/25	<ul style="list-style-type: none"> ・夏休みの宿題について <ul style="list-style-type: none"> 漢字の出し方の変更、会話文の問題作成、確認方法など プロフィシエンシーの1の漢字のレベルの確認結果 ・サマーコースの読解の宿題を授業サンプルとして添付 ・スクリーニングテストのインタビュー試験について（日程、方法の確認） ・足きりの基準と学生の傾向について ・「センターの発信」におけるサマーコースの活用

以上